

救済の記念碑としてのオルサンミケーレのタベルナーコロ

ペストの襲来とその鎮静（1348年）から見た図像プログラム解釈案の提示

成城大学・日本学術振興会特別研究員 出 佳奈子

フィレンツェ、オルサンミケーレ聖堂のオルカーニャ作タベルナーコロは、「オルサンミケーレの聖母同信会」の注文で、1352年から59年にかけて制作された。1291年以来、不治の病を癒すことで人々の信仰を集めていた板絵「オルサンミケーレの聖母」を収納・開示するための、大規模な容器として作られたこのタベルナーコロは、主に浮彫りによって装飾されている。本発表は、ここに表された諸図像が、1348年のペスト後の美術作品の制作および享受を取り巻く状況を反映していること、またペストに関連する図像を含む可能性があることを指摘しようとするものである。

ミラード・ミースは、“*Painting in Florence and Siena after the Black Death*”（1951）において、オルカーニャをペストに続く不安の時代を代表する画家と位置づけ、本作品の浮彫り様式にも、「ペスト後」の様式の特徴である「宗教性・超越性の嗜好」や「1200年代様式への回帰」などが見られるとした。時代背景と様式変遷を結びつけた、このミース説に対しては、様々な議論や批判が行われてきた。しかし、ペスト後に起きた美術作品の制作環境の変化を考慮するならば、様式という点は別としても、この時期の美術作品へのペストの影響は無視できないように思われる。実際、同時代の年代記や著作には、ペストの悲惨さと、それに続く祈祷場建設の増加、また奇跡を起こすと信じられた聖母像などへの信仰の高揚、それに伴って多くの富を集め、聖像の管理と荘厳に努めた同信会への言及が、多数認められるのである。オルカーニャのタベルナーコロは、まさしくこの文脈において制作された。

しかしながら、タベルナーコロに関する近年の研究は、とりわけその浮彫り様式に関して、ミースのテーゼに対する批判を立脚点とし、そこに14世紀前半の美術との繋がりを見出すのを常としている。また、作品中の図像解釈に関する研究では、各々の図像に聖遺物器の機能の神学的意味、同信会による慈善行為との関連性、フィレンツェ・ミラノ間の戦闘（1351年）における勝利の反映などが見出されてきた。しかし、この作品の図像とペストとの関連性は看過されてきたように思われる。1350年には制作が企画され、注文主がペストを機に多くの遺贈金を得た「オルサンミケーレの聖母同信会」である点を考慮するならば、タベルナーコロの諸図像がフィレンツェを襲ったペストに言及している可能性は高いといえよう。

ここでは、多くの同信会が実際に使用していた讃歌写本（*Laudario*）の内容や、ペストに言及した当時のテキスト、およびペスト後に普及した対ペスト図像を検討しながら、この作品の図像プログラムについて考察を加えたい。つまり「聖母の生涯」の諸場面と頂に立つ大天使ミカエル像に注目し、これらの図像がフィレンツェにおけるペストの鎮静および救済に言及していることを明らかにするとともに、この作品は、ペスト後の危機的時代状況を反映するというよりも、危機からの救済の記念碑としての意味を持っていた可能性が高いことを、示したいと思う。